

1. 研究課題名
NRS と FS 併用による終末期患者の疼痛管理
2. 主任研究者 緩和ケアチーム・看護部 / 主任 / 榎本 史子
3. 分担研究者 田辺 義明(外科) 中西 英世(緩和ケア内科) 戸部 有紀子(精神科) 関塚 大(薬剤科)
4. 研究等の概要・目的 痛みは個人的で主観的な体験であり、患者の訴えと行動・表情が一致しない場合、介入に戸惑いが生じることがある。 今回、緩和ケア病棟にがん終末期の統合失調症と向精神薬の副作用のため、表情や言語による表出が乏しく、痛みの訴えと行動・表情が一致せず頻繁に rescue 薬を希望する状況で、支援の方法に悩みながらも多職種で関わり、評価ツールの併用により適切なケアを試みた。 本事例を通して、疼痛管理における信頼関係の構築の重要性について考察し、今後の緩和ケアチームの活動の一助とする。
5. 研究等の対象及び実施場所 2023 年 10 月～2023 年 12 月の期間に緩和ケア病棟へ入院した精神疾患の既往のある患者様について、カルテより調査する 【利用する資料や情報】 ・痛いの程度 ・痛み止め希望回数 ・活動状況 ・看護師の痛みの評価 ・疼痛困難と言う内容の看護記録
6. 研究等における医学倫理的配慮について(Ⅰ～Ⅲは必ず記載のこと) Ⅰ 研究等の対象となる個人の人権擁護 研究の倫理的配慮 調査結果は、個人が特定できないように患者様のプライバシーを厳守し、痛みの程度と心理・社会的苦痛、がん腫の情報のみ示して個人が特定できる情報は記述しない。 Ⅱ 研究等の対象となる者に理解を求め同意を得る方法 ホームページへ掲示、研究に参加したくない(自分のデータを使ってほしくない)方は連絡していただく。 Ⅲ 研究等によって生ずる個人への不利益及び危険性並びに医学上の貢献の予測 本研究は後方視的調査であり、個人への不利益及び危険性はないと考える。 疼痛管理における信頼関係の構築の重要性について、記録を振り返り明らかにすることで、状況に応じた支援・緩和ケアの提供でき QOL の向上に貢献できると考える。